

## アウグスチヌス“De Baptismo, contra Donatistas”に表われた洗礼論上の諸問題について (8)

石橋 泰助

### 第十六章 (第二十五)

『けだし、アベルとエノクとノアとアブラハムを生んだ方〔教会〕自身がモーセや主の到来以前の年代的により後の預言者たちを生んだのであって、またその人々を〔生んだ方〕自身が使徒たちやわが殉教者たちやすべてのよきキリスト者たちを〔生んだのである〕。すなわち、すべて〔これら〕の人々は異なった時代に生まれ出たのであるが、ひとつの民の交わりによって結ばれており、同じ国の市民がこの遍歴の辛苦を〔すでに〕体験したのであって、その〔民の〕中の別の人々は今それを体験しており、また終わりに至るまで〔さらに〕別の人々が〔それを〕体験するであろう。同様に、カインとハムとイスマエルとエサウを生んだ方〔教会〕自身がダタンや他の同じような人々も同じ民の中に生んだのであり、その人々を〔生んだ方〕自身が偽使徒ユダも魔術者シモンも、また〔教会との〕一致のうちに混じっていようとも明らかな分断によって対立していようとも、この時代に至るまでの生物的性向 (*affectio animalis*)<sup>1)</sup> に頑なにこり固まっている他の偽キリスト者たちをも〔生んだのである〕。しかし、このような人々が霊的な人々から福音を受けかつ〔洗礼の〕秘跡に浸される場合はあたかもエサウのようにレベッカが自分自身で彼らを生むようなものであるが、不誠実に<sup>2)</sup> 福音を告げる人々による場合、このような人々も神の民の中に生まれるのである。〔このような人々は〕サラが〔生むのであるが〕しかしハガル〔の母胎〕に

よって〔生むようなものである〕。同様に、良い霊的な人々が肉的な人々の福音伝達および洗礼授与によって生まれる場合、実際にレアまたはラケルが婚姻権によって (*iure coniugali*) 彼らを〔生むのであるが〕、しかし侍女の母胎を通して生むのである。しかし、霊的な人々によって福音の中に生まれる良い信徒たち、すなわち霊的〔成熟〕年齢の状態<sup>3)</sup>に達するか、そこに向かうのをやめないか、〔できるのにやらないのではなく〕不可能だからこそやらないでいる信徒たちは、サラの母胎から〔生まれた〕イサクやレベッカの〔母胎から生まれた〕ヤコブのように、新しい生命と新しい契約へと生まれるのである。』<sup>4)</sup>

本章は、前章に引続き、教会と旧新約との関係にもとづいて「生物的人間」と「霊的人間」との教会における相互関係を述べている。本章は内容にしたがってつぎの二つの部分に分けて考察する。1. 教会は旧約の民をも新約の民をも生み、「霊的人間」をも「生物的人間」をも生む。<sup>5)</sup> 2. 「生物的人間」および「霊的人間」が生まれる方法をそれぞれ二通りに分け、旧約聖書に述べられた種々の母子関係を各々に当てはめて説明する。

1. まずアウグスチヌスは本巻第十章第十四節をふまえて旧約と新約の「霊的人間」すなわち義人を生むのは教会であると述べる。すなわち彼は、旧約のアベル、エノク、ノア、アブラハム、モーセ、主の到来以前の（前記の人々より）あとの預言者たちと、新約の使徒たち、殉教者たち、よきキリスト者たちを列記して、これらすべての人を教会自身が生んだと述べている。アベルは人祖アダムの第二子で、その供え物は主によって嘉納された。<sup>6)</sup> エノクはカインの子、ないしヤレドの子で、神とともに歩み神に取上げられた。<sup>7)</sup> ノアは主のみ心にかない、洪水による滅亡から救われかつ祝福された。<sup>8)</sup> アブラハムはヘブライ人の先祖で、その信仰の強さのゆえに神から契約とそのしるしを与えられた。<sup>9)</sup> モーセは神に召されてイスラエル人をエジプトから解放し、約束の地に導くとともに神から授かった

十誡をもとにイスラエルの立法統治の基盤を作った。<sup>10)</sup> ヘブライ書は旧約における信仰の証人のリストを上げているが、その中に上記の五人の名が全部含まれており、預言者たちについても言及している。<sup>11)</sup> したがってアウグスチヌスはヘブライ書にもとづいてこの義人のリストを記したものと思われる。

つぎに彼は、教会が「霊的人間」だけではなく「肉的人間」をも生むものであることを示し、その例として旧約のカイン、ハム、イスマエル、エサウ、ダタンおよびそのような人々、新約の偽使徒ユダ、魔術者シモン、偽キリスト者たちを列記している。カインはアダムの長子で、その心が正しくなかったので供え物は主に嘉納されず、神に嘉納された弟アベルを殺害した。<sup>12)</sup> ハムはノアの子で、父ノアが酔って裸でいるところを見て軽んじる行動を取ったため、父から呪いを受けた。<sup>13)</sup> イスマエルはアブラハムの長子であるが、正妻サラの子ではなく侍女ハガルの子であったため、後にサラの子イサクが生まれたとき追放された。<sup>14)</sup> エサウはイサクの子で、双子の弟ヤコブに長子権を売り父の祝福を失なった。<sup>15)</sup> ダタンはモーセとアロンに対する反逆の首謀者のひとりで、モーセの祈りによって開いた地に呑み込まれた。<sup>16)</sup> さて、先の「霊的人間」の場合と異なり、新約聖書の中には上記の人の名が列記されている箇所はなく、<sup>17)</sup> また外典を含めて旧約聖書にも上記の名を全部含んでいるテキストはない。<sup>18)</sup> また「霊的人間」のリストと「生物的人間」のリストの間には対照関係がみられないものもある。<sup>19)</sup> したがって、アウグスチヌスはヘブライ書にもとづいて「霊的人間」のリストを取り上げたあと、できるだけ相互の対照関係を考慮しながらもこれにこだわることなく「生物的人間」のリストを作成したと見ることができよう。さらにアウグスチヌスは、新約における「霊的人間」として使徒、殉教者、よきキリスト者を上げ、これと対照的な「生物的人間」として偽使徒ユダ、魔術者シモン、偽キリスト者を上げている。そしてドナートゥス派を「明らかな分断によって対立していようとも、この時代に至るまでの生物的性向に頑なにこり固まっている偽キリスト者た

ち (usque ad haec tempora pseudochristianos in affectione animali pertinaciter obduratos,……sive aperta praecisione dissentiant.)」という表現で「生物的人間」の系譜の中を含めることによって、彼らが救いから除かれた者であることを一層強く印象づけているのである。

さて、アウグスチヌスはこゝで旧約と新約のすべての「霊的人間」と「肉的人間」が、すなわち義人も罪人も同じ教会から生まれるものであることを主張している。洗礼論に関して、こゝには教会が「霊的人間」も「肉的人間」も生み出すということと、「旧約の民」も「新約の民」も生み出すということとの二つの重要な点が述べられている。第一の点については、本巻第十章第十三節ですでに詳しく論じられており、こゝではとくに新しい視点がつけ加えられたということはない。これに対し、第二の点は本巻第十五章第二十三節から始められた論点の継続であるが、こゝでは新約の民と全く同じように教会が旧約の民をも生んだ、と明言することによって、ひとつの新しい視点をつけ加えているのである。すなわちアウグスチヌスによれば、教会は旧約と新約にまたがったものであり、少なくとも「遍歴の辛苦の体験 (experientia laborum peregrinationis)」という観点においては相互に本質的な差異はなく、旧約の民も新約の民もひとつに結ばれているのである。しかしアウグスチヌスによれば、教会は洗礼によって神の民を生むのである。<sup>20)</sup> 換言すれば、キリストへの信仰にもとづいて受洗した人の共同体が教会と呼ばれるのである。これは決してアウグスチヌス固有の考えではなく、新約聖書の教えであり、当時の教会の基本的な立場である。そしてアウグスチヌス自身、洗礼および教会所属が救いのために必要であることを強く主張しているのであるから、<sup>21)</sup> 彼が単的に新約の民と旧約の民を同一視しているのではないことは明らかである。アウグスチヌスは本書の後の方で、洗礼と割礼とを比較対照しながら割礼を洗礼と同じように義とするための sacrament と見なして「〔割礼の〕 sacrament がそれ自身により大きな価値をもっていた。」<sup>22)</sup> と述べ、また他の書でも「肉の割礼は 〔旧律法の〕 sacrament に属している。」<sup>23)</sup> とか「割礼はかの

時代のサクラメントであって、我々の時代の洗礼を型どったものであった。」<sup>24)</sup>と述べている。すなわち彼は、旧約の割礼が新約の洗礼に対応する意味を有していたばかりでなく、それに類する義化の働きを有していたことを明白に認めているのである。<sup>25)</sup>しかし同時に、アウグスチヌスは「キリスト者は割礼を受けない。なぜなら割礼によって預言された事をすでにキリストが成就なさったからである。」<sup>26)</sup>と述べ、割礼は肉の除去以外の何ものでもないので、<sup>27)</sup>「このサクラメントを主ご自身十字架につけられたとき無効とされた。」<sup>28)</sup>のであって、「主の到来以来、肉の割礼から心の割礼へと移された。」<sup>29)</sup>と述べて洗礼と割礼との決定的相違性をも強調しているのである。旧約と新約の連続性と断絶性についての主題は救済史観にとっての根本問題であり、アウグスチヌスは後に大著『神の国 (De Civitate Dei)』の中で旧約と新約にまたがる救済論、教会論を展開する。<sup>30)</sup> 洗礼論の観点からこの主題に対するアウグスチヌスの考え方を要約するならば、彼がパウロに倣って連続性を信仰のうちに断絶性を律法主義のうちに見ていたことは明らかであろう。洗礼と割礼の類似性は信仰の面からとらえるなら連続性のしるしと見ることができ、律法主義の面からとらえるなら断絶性のしるしとして見ることができよう。以上のことから、本章においてアウグスチヌスは旧約と新約の連続的な面に注目し、教会を旧約の民に敷衍して論じているのである。なお、こゝにはいわゆる「望みの洗礼 (votum baptismi)」に関する問題も関連しているが、これについては別の機会に考察したいと思う。<sup>31)</sup>

2. つぎにアウグスチヌスは、教会が生んだ民をその生まれ方に従って四つのパターンに分類している。すなわち彼は、福音を告げ知らせて洗礼を受ける側の人と、受洗する人とをそれぞれ霊的な人と肉のな人とに分け、その組合せによって、(1)肉のな人が霊的な人から、(2)肉のな人が肉のな人から、(3)霊的な人が肉のな人から、(4)霊的な人が霊的な人からそれぞれ受洗する場合に分けている。同時に彼はすでに本巻第十章第十四節で引用

した旧約の太祖たちの親子関係を再び用いながら、(1)をエサウがリベカから生まれた関係に、(2)をイスマエルがハガルからサラの子として生まれた関係に、(3)をダンとナフタリがビルハからラケルの子として、またガドとアシェルがジルバからレアの子として生まれた関係に、(4)をイサクがサラから、またヤコブがリベカから生まれた関係にそれぞれ当てはめているのである。肉的受洗者の比喩的例とされたエサウとイスマエルに共通していることは、両者とも旧約の神の民であるイスラエル民族の祖とされなかったということである。すなわちアウグスチヌスは、血統上イスラエル民族につながっているながら神の救いの計画から外された者を新約における肉적인受洗者の予型と見立てることによって、肉的受洗者が洗礼によって教会につながっているにもかかわらず結局は神の救いに入れない者であることを示そうとしているのである。また、靈的受洗者の比喩的例とされたダン、ナフタリ、ガド、アシェル、イサク、ヤコブに共通していることは、その出自のいかんにかかわらずイスラエル民族の祖とされた点である。アウグスチヌスはこれら太祖たちを靈的な受洗者の予型と見立てることによって、靈的受洗者が洗礼を授ける人によってではなく、本来教会に属している洗礼そのものによって教会につながっており、しかも神の救いに入る者となることを示そうとしているのである。他方、福音を伝え洗礼を授ける人の側に関しては、肉적인人の比喩的例としてサラの侍女ハガルやラケルの侍女ビルハ、レアの侍女ジルバが上げられ、靈的な人の比喩的例としてサラおよびリベカが上げられている。前者はいずれも正妻の代わりに子を生み、自分は生まれた子に対し法的に親の権利を持たないが、後者は親の権利を持った実母である。アウグスチヌスは、これらの太祖の母子関係を新約の洗礼授与者と受洗者との関係の予型と見立てることによって、洗礼そのものゝ直接伝達者と洗礼授与の法的権利保持者を区別し、かつ洗礼授与の法的権利を有しない者が洗礼を授けた場合、受洗者はその洗礼授与者に属する者とならず洗礼授与の法的権利保持者すなわち教会に属する者となることを示そうとしているのである。

ここで、アウグスチヌスが肉的な人と述べているのは、偽使徒ユダや魔術者シモンの系列に属している者であって、「[教会との]一致のうちに混っていようとも、明らかな分断によって対立していようとも、この時代に至るまでの生物的性向に頑なにこり固まっている他の偽キリスト者たち (ceteros usque ad haec tempora pseudochristianos in affectione animali pertinaciter obduratos, sive in unitate permixti sint, sive aperta praecisione dissentiant)」であり、「不誠実に福音を告げる人々 (qui non caste adnuntiant evangelium)」である。すなわち、生物的性向に頑なにこり固まっている偽キリスト者たち、および福音を不誠実に告げる人々は、教会との一致のうちに混っている場合もあり、明らかな分断によって教会に対立している場合もあると述べられているのである。したがって、アウグスチヌスはドナトゥス派など分派を肉的な人と見なしていると同時に、カトリック教会の内部にも肉的な人が混在していることを認めているのである。またアウグスチヌスは、霊的な人を使徒たちや殉教者たちの系列に属しており、「霊的[成熟]年齢に達するか、そこに向かうのをやめないか、[出来るのにやらないのではなく]不可能だからこそやらないでいる信徒たち (boni fideles, qui vel evadunt in spiritualis aetatis affectum, vel eo tendere non desistunt, vel ideo non faciunt quia non possunt)」と述べている。これによって彼は、霊的成熟に達した人だけでなく、そこに向かって努力している人も、さらには不可抗的理由によってそれができないでいる善意の人も霊的な人と見なしているのである。

以上のことから、アウグスチヌスは洗礼が神の民となるための不可欠的要因であることを主張しながら、同時に洗礼が救いの最終的決定要因ではなく、霊的成熟への努力が必要であることを説いているのである。この霊的成熟を具体的にどのように考えていたかはこの箇所だけからは明確ではないが、聖書にもとづいて信仰と希望と愛、とくに愛の実践における卓越さをその具体的な表われと見なしていたのではないではないであろうか。このように解釈するなら、彼が不可抗的理由によって霊的成熟への努

力ができない人と述べたのは、幼児または重病人などが愛を實踐できない状態を示そうとしたのものとして説明することができるであろう。こゝには、救いにおける客観的役割と信仰者の主観的働きの調和が見られるが、両者相互間の作用方法についてのより精密な分析は行われていない。

### 第十七章（第二十六）

『それゆえ、彼ら〔肉的な人〕が〔教会の〕内部に留まっていると見られようともはっきりと〔教会の〕外部に居ようとも、肉なるものは肉なのであり、穀打ち場で自らの不毛のうちに耐え忍ぼうとも試練の機会によって風によるかのように外へ飛ばされようとも、穀殻は穀殻である。また、肉の強情さで聖者たちの集いに混っている者も、汚れも皺もないあの教会<sup>32)</sup>の一致からはつねに切離されているのである。しかし、〔教会の〕内部でこのように見える者であろうと、外部でもっとはっきりと反抗する者であろうと、誰〔の救い〕についても絶望すべきではない。ただし、霊的な人々あるいは忠実な熱心さでこの〔霊的であること〕そのものへと進んでいる人々は〔教会の〕外へ行くことはない。なぜなら、何か倒錯性とか人々の必然性(necessitas)とかによって、〔教会の外へ〕追い立てられているように見えるときでさえも、彼らは教会に反抗して立ち上らされることは決してなく、むしろ一致の固い岩のうちに愛の最も固い心棒によって固着させられているので、彼らはその場合いかに彼らが〔教会の〕内部に留まっているかを一層証ししているのである。<sup>33)</sup> アブラハムのあのいけにえの中で「しかし、鳥は切り裂かなかった」<sup>34)</sup>と云われていることはすなわちこのことに関わっているのである。』<sup>35)</sup>

本章は一つの比較的短い節で成り立っているが、内容にしたがって二つの部分に分けることができる。1. 肉的な人々に対するより徹底的な糾弾。<sup>36)</sup> 2. これに対し、霊的な人々の確固不動さの賞讃。

1. 本章において、アウグスチヌスはまず前章に示した肉的人人に対してより徹底的な糾弾を加えて行く。すなわち彼は、肉的人人がたとえ分派を作らず「肉的強情さで聖者たちの集いに混っている (*congregationi sanctorum in carnali obduratione miscetur*)」としても、「肉なるものは肉であり (*quod caro est, caro est*)」「教会の一致からはつねに切離されている (*semper ab Ecclesiae……unitate divisus est*)」と述べる。そして本巻第十四章第二十二節ですでに用いた聖書の筆法によって「穀打ち場で自らの不毛のうちに耐え忍ぼうとも試練の機会によって風によるかのよりに外へ飛ばされようとも、稗穀は稗穀である。 (*sive in area in sua sterilitate perseverunt, sive occasione temptationis tamquam vento extra tollantur, quod palea est, palea est.*)」と断言する。すなわちアウグスチヌスは、肉的人人は分派を作って教会から分離しようとも、教会の中に居ようとも、結局は教会から決定的に切離された者であり救いの実りを生じない存在であるということを主張しているのである。「肉は肉」「稗穀は稗穀」「教会の一致からつねに切り離されている」という表現によって、アウグスチヌスがこれらの人々の滅びが決定していると考えていたような印象を与える。さらに、彼はカトリック教会について「聖者たちの集い (*congregatio sanctorum*)」「汚れも皺もない教会 (*Ecclesia quae sine macula et ruga est*)」という表現を用いることによって、教会がいかに肉的人人と断絶した存在であるかを一層強調しているのである。<sup>37)</sup> 実際に第十五章からずっと展開されてきた議論の中心点は、ドナトゥス派が洗礼と教えの大部分をカトリック教会と共有しながらいかに真の救いから遠いかを示すことであつたのである。したがって、ここでアウグスチヌスは、これまで述べてきたドナトゥス派論難の声を極限にまで推し進めて偽キリスト者の救いを徹底的に否定したと解することができるのではないであろうか。しかしそれにもかゝらず、アウグスチヌスは一言「しかし〔教会の〕内部でこのように見える者であろうと、外部でもっとはっきり反抗

する者であろうと、誰についても絶望すべきではない。(De nullo tamen desperandum est, sive intus talis apparet, sive qui foris manifestatus adversatur.)」とつけ加えることを忘れなかったのである。

2. アウグスチヌスは、これに対して霊的な人々はたとえどんなに分裂の危機に遭遇しても愛の確固さのゆえに決して教会の一致から離れるものではないことを強調する。<sup>38)</sup> 彼は、どのような霊的な人も教会の外へ追い立てられるような事件におそわれる可能性があることを指摘する。ここでは、その原因として倒錯性(perversitas)と必然性(necessitas)の二つが上げられている。perversitasは敵意や憎悪によって理性が盲目となり理解不可能な凶悪的行為をする状態を示しており、<sup>39)</sup> ここでは肉的な人々の倒錯的行為によって霊的な人々でさえ教会に留まるのを耐えがたくされる事を述べているものと思われる。このような肉的な人々の行為は教会の外でよりも教会の内部で行われる場合にもっと害が大きいことは歴史の示す通りであり、アウグスチヌスは本書でドナトゥス派を糾弾しつつも、同時に教会の内部に生じる耐え難い事件をも想起していたのではないであろうか。necessitasは通常「必然、必須」を意味する。<sup>40)</sup> アウグスチヌスはnecessitasをかなり多様な意味で用いているが、これを人間の自由意志との関係という観点から、(1)自由意志の及ばない領域に関する事柄、したがって本人の責任に属さない事柄、(2)自由意志の及ぶ領域に関する事柄、したがって本人の責任に属する事柄、の二つに大きく分けることができよう。<sup>41)</sup> (2)はさらに、①本人に罪が帰せられる場合、②本人に功績が帰せられる場合、の二つに分けることができる。<sup>42)</sup> 本箇所 で用いられているnecessitasは霊的な人々について述べられているのであるから(1)の意味で解釈しなければならず、それは本人の自由意志による抵抗をはるかに越えた外的圧力が加えられた事件や状況を意味していると云えよう。たゞし、アウグスチヌスがこの語によって具体的に何を云おうとしたか明白ではないが、たとえば迫害や分派抗争によって本人と家族の生命地位財産等が拘

束されあるいは危険にさらされ、霊的な人々でさえも教会から離れざるを得ないような状況を述べていると考えることができようが、推定の域を出ない。

アウグスチヌスはこのような霊的な人々の教会一致における堅固さを「しかし鳥は切り裂かなかった (*Aves autem non divisit*)」という創世記の言葉を引用して示している。創世記においてこの句は、アブラムが主の指示に従って雌牛、雌山羊、雄羊、山鳩とそのひな<sup>43)</sup>を捧げたとき、山鳩とそのひな以外は全部切り裂いたが、鳥すなわち山鳩とそのひなは切り裂かなかったという文脈に用いられている。「山鳩とそのひな」はヴルガータでは“*turtura quoque et columba*”と訳されている。<sup>44)</sup> アウグスチヌスはヴルガータに近いラテン語訳聖書を用いているから、この句の *columba* に注目して解釈したと思われる。*columba* は初代教会以来聖霊のシンボルとして用いられたが、しだいに信徒のシンボルとしても用いられるようになり、すでにアレキサンドリアのクレメンスやオリゲネスにこの用法が見られる。<sup>45)</sup> アウグスチヌスも *columba* を信徒の意味で用いており、<sup>46)</sup> とくに本書の後の方で信徒を *columba* と表現している箇所が見られる。<sup>47)</sup> したがって、彼は上記引用句の *aves* を信徒たちの意味で解釈したとするのが妥当であり、<sup>48)</sup> 創世記のことばを借りて「神は霊的な人々、すなわち真の信仰者を分裂させ給わない」ことを主張したものと云えるであろう。

## 第十八章 (第二十七)

『それゆえ、すでに私は洗礼に関する質問について私が考えている限りのことを充分論述した。そして、ドナトゥス派という名で呼ばれているものは最も明白な分派であるから、あとは分派の汚聖から遠く離れている普遍的教会 (*universa ecclesia*) が洗礼について守っている事柄を私たちが忠実に信じればよいのである。しかしその〔教会の〕中で、もしその〔洗礼の〕問題についていぜんとしてある人々はあることを、別の人々は別のことを平和を守りながら考えていたとしても、普遍的会

議 (universale concilium) によって明快で純粹なあるひとつの事柄がよしと決まったときまで、「愛は多くの罪を覆うからです」<sup>49)</sup> と書かれているように、一致の愛は人間的弱さの過ちを覆ったはずである。けだし、それがなければ他の一切が無益となるようなそのものがあるならば、「他の」何かは欠けても許されるのである。」<sup>50)</sup>

(第二十八)

『至福なる殉教者チプリアヌスの書の中には大きな証拠が出ているので、今私は彼の〔書の〕もとへ行くでしょう——この人たち〔ドナートゥス派〕は彼の〔一致の〕愛によって靈的に打ち破られているのに、この彼の権威を肉的に自分に〔帰して〕うぬぼれているのである。さて当時、全体会議 (plenarium concilium) の決議によって全教会の合意がこの〔洗礼の〕事柄において何が遵守されるべきかを確定する<sup>51)</sup> 以前、彼〔チプリアヌス〕にはアフリカの諸教会のおよそ 80 人の同僚司教と共に、カトリック教会の交わりの外で受洗したすべての人は教会へ戻って来るときもう一度受洗すべきである、と考えられたのである。教会の平和が健全に保たれるための彼〔チプリアヌス〕の忠実なる謙遜と愛とが明らかになること、<sup>52)</sup> また彼の時代のキリスト者にだけでなく後の〔時代の〕人々にも治療的——と私は云いたい——知識として銘記されること、たしかにそのために主はこれほどの人物に〔彼の決定が〕正しく行なわれていないことを明示しなかったのである。すなわち、これほどの貢績の、これほど〔重要な〕教会の、これほどの精神の、これほどの弁舌の、これほどの有徳な司教が洗礼について〔あとで〕より熱心に調べられ確認されるであろう真理とは別のことを裁定したとき——多くの彼の同僚〔である司教たち〕はまだ〔教会から〕明白に示されていなかったにもかゝらず、以前の教会の習慣やまた後に全カトリック世界も奉じた〔正しい〕事柄を守ることができたのであるが——それでも彼は異なって考える他の人々から交わりを断って自らを切り離したりはせず、また

他の人々に対して平和の絆のうちに霊の一致を保つよう努めながら愛のうちに互いに忍び合うよう強くすゝめるのをやめなかったのである。<sup>53)</sup> それゆえ、身体の結合がそのように〔ひとつに〕保たれているとき、もしある肢体のうちどれかが病気となったなら〔その肢体が身体からの〕切断によって殺されいかなる治療の熱意をも受けられなくなるよりは、むしろそれら〔つながっている他の肢体〕の健康によって回復するようになったとであろう。さて、もし彼〔チプリアヌス〕が自らを〔教会から〕切り離れたとしたなら、どれほど多くの人々が〔彼に〕従ったことであろう。〔彼は人々の間で〕自分にどれほど大きな名をなしたことであろう。ドナトゥス派よりもどれほど広くチプリアヌス派と呼ばれたことであろう。しかし彼は「彼らが称揚されたときあなたは彼らを斥けられた」<sup>54)</sup>と云われたような滅びの子ではなく、教会の平和の子であって、彼にとって〔教会の示した正しい教えとは〕別の事柄の方がはるかに優れていると考えられるようにはある事柄を見なさなかつたほどの心の明るさを備えた人であった。使徒〔パウロ〕は云う、「ここで、わたしは、はるかにすばらしい道を示しましょう。たとえ人間の言葉、天使の言葉を話しても、愛がなければ、わたしは鳴る銅鑼、響くシンバル。」<sup>55)</sup>したがって、彼は秘跡の隠された秘密を識別するには洞察し足りなかつたのであるが、しかしもしすべての秘跡を知っていたとしても愛をもっていなかつたなら何もかもなかつたであろう。しかし、彼は前者〔秘跡〕を洞察し足りなくても後者〔愛〕を謙虚に忠実に強固に守つたので殉教の冠に到達するのに価したのであって、それはたとえ彼の明るい精神へ人間的条件からいづらか雲が這い込んでだとしても、輝やかなしい血〔殉教〕の光栄ある清朗さによって追ひ払われてしまうほどなのである。けれど、主イエス・キリスト御自身は御自分をぶどうの木、御自分の〔弟子たち〕をぶどうの木に〔ついて〕いる蔓と云われたとき、彼らが実を結ばない無益な蔓のように幹から切り離され取除かれるであろうと無意味に云われたのではない。だが、〔主が〕さらに「私は、あなたがたが互

いに愛し合うように、という新しいおきてをあなたがたに与えます」<sup>56)</sup>と云われたあの新しい実以外のどのような実があらうか。この〔実〕こそは、それがなければ他の事柄は何の役にも立たないその愛のことなのである。使徒〔パウロ〕もこう云っている、「しかし、霊の結ぶ実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」。<sup>57)</sup> これらすべては愛から始まり、他の組み合わせによってあたかも不思議なぶどうの房〔のような実〕をなすのである。けだし、愛の実によって非常に優れた人々でさえも、農夫が耕さずに放っておくことのないような、何か清められるべきものを有しうるといのでないならば、同じ主が「しかしわたしについている枝で実を結ぶものをもっと豊かに実を結ぶように父がきれいに刈り込む」<sup>58)</sup>と無意味にはつけ加えられなかったであろう。したがって、あの聖なる人〔チプリアヌス〕は、洗礼について、後に探究された最も熱心な考察によつて確立されたありのままのことは異なつて考えながらもカトリック的一致に留まり、かつ愛の豊かさによってあがなわれ、かつ〔殉教の〕受難の大鎌で清められたのである。』<sup>59)</sup>

本章は、1. 洗礼の問題に関して、たとえ見解の相違が存したとしても我々の取るべき態度は一致の愛を保つことである、と述べた比較的短い節（第二十七節）と、2. この点に関してチプリアヌスが示した模範、およびその評価と賞讃を記した比較的長い節（第二十八節）とから成り立っている。

1. アウグスチヌスは、以上で洗礼に関するドナトゥス派との主要な論争点について自分の考えを充分論じたと述べた上で、この問題に関してカトリック者の取るべき態度を簡潔に示している。すなわち彼は、(1)ドナトゥス派の汚聖から離れている普遍的教会が守っている事を忠実に信じること、(2)普遍的教会の中でも見解の相違が存するときは、普遍的会議によつて結論が出るまでは一致の愛に留まるべきことを教える。こゝでアウグス

チヌスは、カトリック教会内においても洗礼の問題に関して必ずしも見解がすべて一致しているわけではないことを示唆している。「しかし、〔教会の〕中でもしその〔洗礼の〕問題についていぜんとしてある人々はあることを、別の人々は別のことを……考えていたとしても、(In qua tamen si aliud alii, et aliud alii adhuc de ista quaestione……sentirent,)」という記述はまず第一にチブリアヌスの時代の論争を述べたものとして解することができよう。<sup>60)</sup> その場合、「普遍的会議 (universale concilium)」は本巻第七章第九節で述べられた「全地の完全な会議 (plenarium totius orbis concilium)」を指していると思われる。<sup>61)</sup> しかし同時に、この一文はアウグスチヌスの時代の教会およびその将来の教会の姿をも考慮に入れて書かれたものと解すべきではないであろうか。「一致の愛は人間的弱さの過ちを覆う (humanae infirmitatis errorem cooperit charitas unitatis)」ということはいつの時代の教会にとっても重要な行動原理だからである。続いて述べられた「それがなければ他の一切が無益となるようなそのものがあるならば、〔他の〕何かが無ければ許される (Qua absente caetera inaniter habentur, eadem praesente quaedam venialiter non habentur)」という句は、本巻第九章第十二節の「もしあるひとつのものが欠けたならば、〔それ以外の〕どれほど多くのものもどれほど大きなものも何の役にも立たない (quam multa et quam magna nihil prosint, si unum quiddam defuerit)」という句と対をなしている。アウグスチヌスはこれによって、チブリアヌスとドナートゥス派との決定的な違いをひとつの事、すなわち一致の愛の有無に絞って鮮明に描き出しているのである。

2. アウグスチヌスは、ドナートゥス派がいつもチブリアヌスの権威によって自分たちの正当性を主張しているのに対し、チブリアヌスの文献や事跡を詳細に検討することによってドナートゥス派を打破することを本書の主要な目的のひとつとしていた。<sup>62)</sup> 本節は第二巻以下に展開されるチブリアヌス研究への導入となっており、内容にしたがって、(1)ドナートゥス派

がチブリアヌスの権威を頼めないこと、およびチブリアヌスの取った立場についての事実関係の簡単な叙述、<sup>63)</sup> (2)チブリアヌスが誤った結論を出したことの摂理の理由、<sup>64)</sup> (3)チブリアヌスの真の偉大さの根拠とそれに対する賞讃、<sup>65)</sup> に分けることができる。

(1) すでにアウグスチヌスが本書の冒頭で述べたように、ドナートゥス派は、当時教会の中で大きな権威をもって認められていたチブリアヌスの教えを論拠として、自分たちの立場の正当性を主張していた。しかしアウグスチヌスは、チブリアヌスの書そのものゝ中に彼らの主張する正当性を打破する根拠が存することを指摘する。その根拠は教会一致の愛の有無であって、すでにアウグスチヌスが論述してきたよにこの愛の有無によってドナートゥス派は霊的レベルにおいてチブリアヌスと無縁なものであり、単に肉的レベルにおいてだけチブリアヌスの権威を利用するにすぎない者であることが明白に示されているのである。アウグスチヌスは、チブリアヌスがアフリカの約80人の司教と共に教会会議を開き、「カトリック教会の交わりの外で受洗したすべての人は教会へ戻って来るときもう一度受洗すべきである。(omnis homo, qui extra Ecclesiae catholicae communionem baptizatus fuisset, oportere ad Ecclesiam venientem denuo baptizari.)」と決定した事実を述べる。この教会会議は、アウグスチヌス自身が本書第二巻以降で詳細に取り上げる256年のカルタゴ教会会議を指している。<sup>66)</sup> またアウグスチヌスは、この教会会議が行なわれたのは、この問題が全体会議の決議によって「何が遵守さるべきであるか(quid sequendum esset)」を決定する以前のことであったことを明記しているが、このことは以後の本書の論述にとって重要なポイントになるのである。

(2) アウグスチヌスは続いて、チブリアヌスがカトリック教会とは明らかに異なる決定を下した事実にもとづき、なぜ主はチブリアヌスほどの聖なる人物が誤まるのを許したもうたのか、という疑問に一応の説明を試みている。彼はこゝで二つの理由を上げる。すなわち、①教会の平和を保ったチブリアヌスの忠実な謙遜と愛がどれほど偉大であったかが明白になる

ため、②チプリアヌスの時代とそれ以後の時代の人々にとって治療的知識 (medicinalis notitia) となるために「主はこれほどの人物に〔彼の決定が〕正しく行われていないことを明示しなかった (Quod non recte fieri tanto viro nimirum propterea Dominus non aperuit)」のであると述べている。こゝには、アウグスチヌスの深い信仰にもとづく透徹した洞察力が示されているのではないであろうか。

(3) さらにアウグスチヌスは、チプリアヌスの真の偉大さへと目を向ける。すなわちアウグスチヌスは、チプリアヌスの偉大な点は、彼が判断において誤ったにもかかわらず行動において正しかったところにある、と主張している。チプリアヌスは職責上ひとつの決定を下さなければならなかったが、自分の判断を絶対化せず、考えの異なった人々との一致の絆を破壊しなかったのである。アウグスチヌスは、もしチプリアヌスが自分と意見を異にする人々の教会から袂を分かったとしたなら、ドナトゥス派よりもはるかに強大なグループを結成することができたはずだ、とドナトゥス派に対する皮肉をいさゝかこめて述べている。そして、チプリアヌスが自己の判断を絶対化しなかったのは彼の心の明るさによると述べている。またこゝで、再度1コリント12,31と13,1の愛の讃歌の一部を引用しながら、チプリアヌスが秘跡の洞察に関して足りないところがあっても、その愛ゆえに殉教の光栄に価するものとなった、と説いている。アウグスチヌスはさらに、ヨハネ15,1以下のぶどうの木の喩に言及しながら、どのように優れた人でもより豊かに実を結ぶために父なる神によって刈込まれるべき所があるのであり、チプリアヌスの判断の誤りは彼の愛ゆえに殉教によって清められた、と述べている。アウグスチヌスはこの箇所でもチプリアヌスの再洗礼に関する判断に誤りがあったことを認めながら、同時にその誤りがいささかもチプリアヌスの偉大さを傷つけるものでないことを示しつつ、全体としてチプリアヌスに対する賞讃を行っているのである。

本節は、洗礼論に関して特に考察すべき内容を含んでいないので、以上で検討を終わることとする。

## 第十九章（第二十九）

『しかし、私が証明〔の煩わしさ〕を避けるためにこれらのことを至福なる殉教者〔チプリアヌス〕の誉れ——その誉れは彼〔チプリアヌス〕のものではなく、〔彼を〕御自分の恩恵によってこれほどの者となされた方のものである——に当て、云っている思われないように、いま私たちは彼の手紙からそれによってドナートゥス派の口がほとんど閉ざされてしまうような証拠を提出しよう。すなわち、彼ら〔ドナートゥス派〕は、自分たちのもとへやって来る信徒たちにもう一度受洗することをまるで正しく行なっているかのように見せるために無学な人々に向かって彼〔チプリアヌス〕の権威を持ち出しているのである。彼ら〔ドナートゥス派〕は非常に憐れであり、彼〔チプリアヌス〕があゝの平和——彼ら、すなわち「平和の道を認めなかった」<sup>67)</sup>者たちがそこから迷い去ってしまった平和——によって終わりまで耐え忍び通した群の中にも歩んだからこそ彼には妨げとならなかったその事柄〔再洗礼〕を模倣することをこれほどの人物のうちを選んでいたのである。キリストの洗礼はどこにおいても聖であるということであり、たとえ異端者たちや分裂者たちのもとにあっても、異端や分派自身のものではないのであり、したがってそこからカトリック〔教会〕自体へとやって来る人々がもう一度受洗する必要はないのである。だがしかし、カトリック的平和から迷い出て、分裂の極悪な陥穽へと突き落とされた人々がその上さらに〔自分たちのもとへ来る人々は〕再受洗すべきであると判断することはこれ〔チプリアヌスの場合〕とは別のことである。なぜなら、聖なる魂の清らかさの中の彼〔チプリアヌス〕のしみを〔彼の〕豊かな愛が覆い包んだのであるが、彼ら〔ドナートゥス派〕のぞっとするような醜悪さの中の煤けを〔彼らの〕争い好きな容貌が目立たせているのである。しかし、私たちはこれら至福なるチプリアヌスの権威に関わる事柄を取扱おうに当たり、巻を改めたいと思う。』<sup>68)</sup>

本章は第一巻のしめくゝりに当たるが、内容的にはむしろ第二巻の序論と見ることができよう。本章も洗礼論に関しては特に考察すべき内容を含んでいないので、アウグスチヌスの主張していることを三つのポイントに絞って簡単にふれておくにとゞめることとする。

第一に、アウグスチヌスは、チプリアヌスが教会復帰者に対して再洗礼を要求した場合と、ドナートゥス派が自派への加入者に対して再洗礼を要求している場合とでは、根本的な相違があると主張している。アウグスチヌスはすでに再洗礼の問題について、チプリアヌスの取った態度とドナートゥス派の態度との間には一致の愛の有無という根本的な差異があることを主張してきたが、こゝではさらに再洗礼についての考え方そのものの中にも相違があることを主張しているのである。その具体的な相違については、第二巻以下に詳細に述べられることになる。

第二に、アウグスチヌスは教会帰正者の再洗礼不要というカトリック教会の教えを簡潔に再確認しているが、その理由として「キリストの洗礼はどこにおいても聖であるということであり、たとえ異端者たちや分裂者たちのもとにあっても、異端や分派自身のものではない。(Est quidem quod Christi Baptisma ubique sanctum est, et quamvis apud haereticos vel schismaticos, ipsius tamen haeresis vel schismatis non est.)」という点を上げている。ドナートゥス派との論争の中心点であるこの問題は第一巻の主要テーマのひとつであり、かなり詳細に論じられ、また種々の論拠が示されてきた。こゝでアウグスチヌスが本巻を締めくゝるに当たり、このテーマを極めて要約した形で述べながら、再洗礼否定の論拠をこのひとつだけ上げたということは、彼がこれを自説の最も深い論拠と考えていたことを示すものと解することができよう。

第三に、アウグスチヌスは、チプリアヌスとドナートゥス派との相違を示すために「聖なる魂の清らかさの中の彼〔チプリアヌス〕のしみを〔彼の〕豊かな愛が覆い包んだのであるが、彼ら〔ドナートゥス派〕のぞっと

するような醜悪さの中の煤けを〔彼らの〕争い好きな容貌が目立たせている。(illum naevum in candore sanctae animae charitatis ubera contegebant: hanc autem fuliginem in istorum tartarea foeditate vultus impacatus ostentat.)<sup>69)</sup>という表現を用いている。両者の相違は、チブリアヌスの書と行動の分析を通して第二巻以下に論理的、客観的に明らかにされて行くのであるが、ここでアウグスチヌスが極めて感性的、主観的に両者の違いを描写したことは大変興味深いことである。この一文は、アウグスチヌスがきわめて理知的な思索家である反面、同時に直観的な感性にも非常に富んでいたことを示すものと云えよう。

## 結 語

以上でアウグスチヌスの“De Baptismo, contra Donatistas”第一巻の洗礼論に関する基礎的研究を終了する。本論文の冒頭、「序論」で述べたように、本研究の意図は、アウグスチヌスが本書中に提起した洗礼論上の問題と、それに対する彼自身の解答を可能なかぎり明白に把握することにあった。<sup>69)</sup>当初まだ邦訳のなかった本書を研究するに当り、まずできるかぎり原文に忠実な邦訳文を作り、内容を理解するのに必要な歴史的背景を考察し、さらに論旨の構成や用語およびテキストについて検討を加えた上で、洗礼論上重要な問題点を教理神学の立場から考察するという方法を取った。この研究によって、アウグスチヌスの洗礼論に関する基本的な考え方のみならず、彼の思想体系や論理構成などについても少なからず知ることができたが、同時に浅学非才な筆者には解明しきれない点にも多々遭遇したことを認めざるを得ない。もちろんそれは能力の限界によるものであると同時に、本論文の採用した研究方法の限界でもあろう。さいわい本論文執筆中に坂口昂吉、金子晴勇両氏による本書の邦訳が出版された。<sup>70)</sup>したがって、これまでの方式による本書の研究はひとまず筆を置き、他日を期して本書全巻にわたる洗礼論上の考察を試みたいと思う。このきわめ

て基礎的な研究がいずれアウグスチヌスの洗礼論全体の体系的考察の足がかりとなり、さゝやかな資料として彼の総合的研究のための一助にでもなれば幸甚である。〔終〕

〔註〕

- 1) affectio は動詞 *adficio* (働きかける) に由来し、ある影響によって人の中に惹起された事柄への対応状態 (*disposition*) を原意とする。こゝから、心身の一時的状態 (気分 *feeling*)、心の恒常的状态 (性向 *state of feeling*)、好意的な心の状態 (好情 *love, affection*) および意欲的能力 (意欲 *volition*) などの意味を有するようになった。こゝでは頑固な一定の態度のもととなっている心的状態という点を重視して「性向」と訳した。NPNF の英訳は *carnal affections* と複数形を用いている。Cf. ALD (= Lewis and Short; A Latin Dictionary, London 1975. 前号まで OLD の略記を用いたが Oxfor Latin Dictionary, London 1968 との混同を避けるため、今号では略記を変更した) p.65.
- 2) *non caste*. AOO はこの句の根拠としてフィリピ 1, 17 「先の人たちは、純粹な気持ちからではなく (*οὐχ ἀγνῶς*, ヴルガタ *non sincere*) 対抗意識から、キリストを告げ知らせ、とらわれの身にあるわたしに、さらに苦難を及ぼそうとしているのです。」を上げている。
- 3) *affectus*. 上記 *affectio* と同じく *adficio* に由来し、ある影響によって人の中に惹起された身体および特に心の状態 (*state*) を意味する。Cf. ALD p.66.
- 4) “*De Baptismo, contra Donatistas*” lib.1, cap. 16, n. 25 (AOO 9,176).
- 5) 始めより、「……他の偽キリスト者たちをも生んだのである。(……*sive aperta praecisione dissentiant.*)」まで。
- 6) Cf. Gen 4,2-4.
- 7) Cf. Gen 4,17; 5,18: 21-24.
- 8) Cf. Gen 6,8: 13-9,29.
- 9) Cf. Gen 12,1-18,33; 20,1-24,9; 25,1-7.
- 10) Cf. Ex 3,1-40,38.
- 11) Cf. Heb 11,4-38.
- 12) Cf. Gen 4,1-16.
- 13) Cf. Gen 9,20-27.
- 14) Cf. Gen 16,1-15; 21,9-14.
- 15) Cf. Gen 25,24-34; 27,1-40.
- 16) Cf. Num 16,1-33.
- 17) 新約聖書には、カンイについて (1 Joh 3,12; Heb 11,4; Juda 11)、エサウについて

- (Rom 9,11; Heb 12,16)、イスマエルについて (Gal 4,21-31) 述べられているにすぎない。
- 18) Ps 106 (Vg 105), 17: 22 はダタンとハムの名を記しているが、後者は地名として述べられているにすぎない。
- 19) アベルとカインが兄弟、ノアとハムが親子、アブラハムとイスマエルが親子、モーセとダタンが主従の関係になるが、残ったエノクとエサウには直接的関係はない。
- 20) 本巻第十章第十四節参照。
- 21) Cf. Epist., 166,7,21; De peccat. merit. et remiss., 1,24,34; etc.
- 22) “……et ipsum [sacramentum circumcisonis] per se ipsum sacramentum multum valebat.” De Bapt. ctr Don., lib.4, cap.24, n.31 (AOO 9,244). 訳文は金子晴勇訳「洗礼論」アウグスティヌス著作集第8巻、教文館、1984、197頁より引用。
- 23) “Ad sacramenta [veteris legis] pertinent, circumcisio carnis,……” In Exposit. epist. ad Gal., cap. 3, n.19 (AOO 3,2673).
- 24) “Circumcisio quippe fuit illius temporis sacramentum, quod praefigurabat nostri temporis Baptismum.” De Anima et eius orig., lib.2, cap.11 (AOO 10,731).
- 25) Cf. Ctr. Iulian., lib.6, cap.7; etc.
- 26) “……non circumciditur Christianus, quia id quod eadem circumcisione prophetabatur, iam Christus implevit.” Ctr. Faustum, lib. 19, cap.9 (AOO 8,504s).
- 27) Cf. Ctr. Faustum, lib.16, cap.29.
- 28) “Hoc sacramentum ipse Dominus, quamvis evacuaverit crucifixus.” Epist. 203 (ad Maximianum), n.4 (AOO 2,47).
- 29) “Ab adventu autem Domini, ex quo ad circumcisionem cordis a carnis circumcisione transitum est, ……” Psalm.6, n.2 (AOO 4,32).
- 30) この問題は、アウグスティヌスの教会論、救済論、秘跡論等との関連から詳細な研究が必要となろう。“De Civitate Dei”の救済史観に関しては以下の各書を参照。J. Vetter, Der Hl. Augustinus und das Geheimnis des Leibes Christi, Mainz, 1929; J. Ratzinger, Volk und Haus Gottes in Augustins Lehre von der Kirche, München, 1954; C.J.Perl, Augustinus der Gottesstaat, Paderborn, 1979 (Bd. 1, Einföhlung, p. XIX-XLII); 近山金次「アウグスティヌスの歴史的世界」慶応通信、1978、p.298 f; 岡野晶雄訳「神の国」(4)アウグスティヌス著作集14、教文館、1980、解説p.501 f.
- 31) 筆者の未完の小論「Votum Baptismi (望みの洗礼) についての一考察」(1)その歴史的發展(教父)、アカデミア 37 (160)、1983、75頁以下参照。
- 32) Cf. Eph 5,27.
- 33) AOO のテキストは“ibi magis probantur, quam si intus permaneant”となっており「彼ら〔霊的な人々〕は内部に留まっていたとするよりもより多くそこ〔教会の外〕で証しされているのである」の意味になる。NPNFの英訳“they are more approved than if they had remained within”も AOO に従っている。CSELのテキストは“ibi

magis probant quam intus permaneant”を採用しており、後述する理由で本訳はこれに従った。

- 34) Gen 15,10. テキストはヴルガタと一致している。
- 35) “De Baptismo, contra Donatistas”lib.I, cap. 17, n.26 (AOO 9, 176s).
- 36) はじめより「しかし、誰〔の救い〕についても絶望すべきではない。(sive qui foris manifestius adversatur.)」まで。
- 37) ただし、アウグスチヌスは「汚れも黻もない教会」という言葉の解釈について、のちに『再考録 (Retractationes)』第二巻第十八章の中でつぎのように述べている。「本書の中で私が『教会は汚れも黻もないもの』を想起したところではどこでも、あたかもすでにそうあるかのように〔意味を〕受取るべきではなく、〔教会が〕光栄あるものとしてさえ現れるであろうその〔未来の〕ときにそうあるように準備されていると〔受取るべきである〕。すなわち今は〔教会〕自身のメンバーの何かの無知や弱さのために『われらの負目を許したまえ』と〔教会〕全体が毎日となえなければならぬ〔理由がある〕のである。」(AOO 9,155).
- 38) 上記註 33) に示した AOO のテキストに従うなら、本箇所解釈はかなり変更しなければならないであろう。すなわち本文章の主文節は“ibi magis probantur, quam si intus permaneant,”であり、主語は spirituales、また ibi は文脈からみて foris の意味で解せざるを得ないから、文章全体は「教会の外に居る霊的な人々」について述べていることになる。もしこれがアウグスチヌスの真意であるなら、彼は教会を可視的教会（現実にあるカトリック教会）と不可視的教会（理想としての教会、聖者たちの集いであり汚れも黻もない教会）とに分けて考えていたことになる。しかし、このような推定はアウグスチヌスの教会論と相容れないものであり、本書の論調にもそぐわないものである。しかもアウグスチヌス自身前記のように『再考録』の中でこのような教会観を否定しているのである（たゞし、この点についてアウグスチヌスが自分の教会観をのちになって訂正したものと解釈することも不可能ではないのであるが）。したがって、本箇所は CSEL のテキストに従う方が本書全体の整合性を保つのに優れていると云えよう。
- 39) 本論文(2)『南山神学』第 3 号、1980 年、8 頁以下参照。
- 40) necessitas は necesse(必須の)に由来し、「必須であることの事実(the fact of being indispensable)」「事物の本性上の必然 (necessity as inheritant in the nature of things)」を意味し、「強制(constraint)、困難(difficulty)、欠乏状態(a state of want)」などから、さらに「運命 (fate)、自然法 (a law of nature)」等の意味を派生する。Cf. OLD(=Oxford Latin Dictionary, London, 1968) p. 1165; ALD p. 1195.
- 41) 前者はたとえば「主よ、飲食において必要の限度をこえて、すこしでもさそわれることのないような人間がいるでしょうか? ([manducando et bibendo] quis est, Domine, qui non rapiatur aliquantulum extra metas necessitatis?)」(Confessiones, lib.10, cap.31, n.47: AOO 1,316. 訳文は山田晶訳「告白」中央公論社、1968 年、374

頁から引用)とか、「私たちは意志によって死ぬのではなく、必然性によって死ぬのだ。

(non voluntate morimur, sed necessitate;)(De libero arbitio, lib.3, cap.3, n.7: AOO 1,997. 訳文は今泉三郎訳「自由意志論」創造社、1966年、190頁から引用)とか、「また神や人間の意志以外に、ある種の秩序の強制によって生じるとき、それは運命的なものである。(ea [dicunt esse] fatalia, quae praeter Dei et hominum voluntatem cuiusdam ordinis necessitate contingunt.)」(De Civitate Dei, lib.5, cap. 1: AOO 7,187. 訳文は赤木善光、金子晴勇訳「神の国」(1)アウグスティヌス著作集 11、教文館、1980年、310頁から引用)と述べられているように、自然や人間の本性から生ずる必然を意味しており、アウグスティヌスはこれに「よりよい事柄へと、駆り立てる必要性は幸いである。(Felix est necessitas quae in meliora compellit.)」(Epistula 45, ad Armentarium et Paulinam, n.8: AOO 2,562)とか、「必要性はあらゆる人間的行為の母である。(Omnium enim actionum humanarum mater necessitas.)」(Psalm.83, n.8: AOO 4,1262)というように積極的評価を与えている場合もあるが、概して「人がもし意志によってではなく必要性によって神の教えに仕えるなら、彼は最も善い人間ではないであろう。(Non enim esset optimus, si Dei praeceptis necessitate, non voluntate serviret.)」(De agone christiano, cap.10, n. 11: AOO 6,426)とか、「われわれは神のみを愛し、この世のすべてのもの、すなわち、あらゆる感覚的なものを蔑視し、これらのものはたゞ、現世の生活の必要をみたすために使用しなければならないのである。(Amandus igitur solus Deus est: omnis vero iste mundus, id est, omnia sensibilia contemnenda; utendum autem his ad huius vitae necessitatem.)」(De moribus Eccl. cathol., cap.20, n.37: AOO 1,1135. 訳文は熊谷賢二訳「カトリック教会の道徳」創文社、1963年、68頁から引用)というように消極的な評価しか示されていない場合が多い。

- 42) ①はたとえば「転倒した意志から情欲が生じ、情欲に仕えているうちに習慣ができ、習慣にさからわずにいるうちにそれは必然となってしまったのです。(Quippe ex voluntate perversa, facta est libido: et dum servitur libidini, facta est consuetudo; et dum consuetudini non resistitur, facta est necessitas.)」(Confessiones, lib.8, cap.5, n.10: AOO 1,256. 訳文は前記山田晶訳 265頁から引用)とか、「自由から派生し、いまや罰となっている背徳的行為は〔内的〕必然性をひき起したのである。(…… sed iam poenalis vitiositas subsecuta, ex libertate fecit necessitatem.)」(De perfectione iustitiae hominis, cap.4, n.9: AOO 10,437. 訳文は金子晴勇訳「人間の義の完成」アウグスティヌス著作集 9、教文館、1979年、257頁から引用)とか、「ところで罪を犯す、ある必然性が自然本性の壊敗から生じているであって、…… (Quod autem ex vitiis nrae, …… sit quaedam peccandi necessitas, ……)」(De natura et gratia, cap.66, n.79: AOO 10,418s. 訳文は金子晴勇訳「自然と恩恵」アウグスティヌス著作集 9、同上、236頁から引用)と述べられているように、罪にもとづく人間本性の脆弱化によって、自由意志決定がほとんど不可能となった状況を意味し、これは「意

志は罪を犯したゆえに、罪をもつという冷酷な必然性が罪を犯している者に結果している。(Quia vero peccavit voluntas, secuta est peccantem peccatum habendi dura necessitas,……)」(De perfect. iust. hom., cap.4, n.9: AOO 10,438. 訳文は前記金子晴勇訳 257 頁から引用)と述べられているように、罪の結果、いわば罪の状態として考えられている。②はたとえば「意志によって節制を選んだ人は、それを必然の事柄としてしまう。何故なら処罰なしにそれから迷い出ることができなくなるからである。

(quia et illi qui eam [continentiam] voluntate delegerunt, fecerunt eam esse necessitatis; quoniam iam sine damnatione ab illa deviare non possunt:)) (De adulternis coniugiis, lib.2, cap.19, n.20: AOO 6,701)とか、「この状態 [罪をもつ必然性] は弱さが全面的にいやされ、幸福に生きる意志が自由によって必然的に存続するようになり、……自発的にかつ幸福な必然性が生じるほどに偉大な自由が受領されるにいたるまで続くのである。(donec …… accipiatur tanta libertas,…… ita ut sit …… numquam peccandi voluntaria felixque necessitas.)) (De perfect. iust. hom., cap.4, n.9: AOO 10,438. 訳文は前記金子晴勇訳 257 頁以下から引用)とか、「愛の義務は正しい仕事を引受ける。(negotium iustum suscipit necessitas charitatis.)) (De Civ. Dei, lib.19, cap.19: AOO 7,906. 訳文は松田禎二訳「神の国」(5)アウグスティヌス著作集 15、教文館、1983 年、75 頁から引用)と述べられているように、強い意志による自己制御の結果、己に課せられた責任や義務を看過し放棄することがほとんど不可能となった状態を意味している。なお、以上のほかに、アウグスティヌスは necessitas を神の予知の必然性を示すために類比的に用いたり (cf. De Civ. Dei, lib.5, cap.10, n. 1)、自由意志との対比 (cf. Psalm.99; 134) や喜びとの対比 (cf. Sermo I, de div., cap. 6) などを示すためにも用いている。

43) 「山鳩とそのひな」は日本聖書刊行会訳による。マソラのヘブライ語テキストは “w-tōr w-gōzāl” で、tōr は turtledove (AHCL = Analytical Hebrew and Chaldee Lexicon, London, 1967)、gōzāl は young pigeon (AHCL) である。LXX ギリシャ語テキストは “καὶ τρυγώνα καὶ περιστερᾶν” であって、τρυγών は turtledove (IGEL = An Intermediate Greek – English Lexicon, London, 1964)、περιστερᾶ は common pigeon or dove (IGEL) である。JB (= Jerusalem Bible) は “a turtledove and a young pigeon” と訳している。

44) turtur は男性名詞で、OLD も ALD も turtle dove (きじばと) という訳語を示している。columba は女性名詞で、dove (はと)、pigeon (はと、家ばと) と訳される。Cf. OLD p. 357; ALD p.371.

45) Cf. Heinrich Greeven, περιστερᾶ, τρυγών, D. The Dove in the Early Church, ThDNT 6,63s.

46) たとえば Tract.5 in Ioan. 参照。アウグスティヌスは columba を聖霊のシンボルとしても用いている。cf. Psalm.130, exposit.

47) Cf. De Baptismo, ctr Don., lib.3, cap.18, n.23; lib.5, cap.16, n.21.

- 48) 坂口昂吉氏は本箇所註で、この場合の鳥すなわち鳩をカトリック教会の象徴と述べている。しかし、本箇所に於いて「鳥」は複数形 *aves* となっているので、信徒の意味で解するのが妥当であろう。たゞし、本書第五卷第二十一章第二十八節の *columba* は明らかに教会の意味で用いられている。坂口昂吉訳「洗礼論」アウグスティヌス著作集 8、教文館、1984年、477頁、註 25 参照。
- 49) 1 Pt 4,8. 本文テキストの *cooperit* (覆う) はウルガタでは *operit* (覆う) が用いられている。
- 50) “De Baptismo, contra Donatistas” lib. I, cap.18, n.27: AOO 9,177.
- 51) Cf. *infra* lib.2, cap.3.
- 52) ある写本 (Eugipii excerpta ed. Knoell) には「また彼の時代の…… (et non solum ……)」から「……響くシンバル。」(……*cymbalum tinniens*)」までが欠落している。
- 53) AOO も CSEL も本箇所参考として Eph 4,2: 3 「あくまでもへりだりとやさしさを持ち、がまん強く、愛によって互いに耐え忍び、平和というきずなで結ばれて、聖霊のもたらす一致を大切に保つよう熱心に努めてください。」を上げている。本文テキスト “*ut sufferrent invicem in dilectione, studentes servare unitatem spiritus in vinculo pacis.*” のうち下線部分が Eph 4, 2: 3 のウルガタ訳テキストと一致している。
- 54) Ps 73 (Vg 72),18. 本文テキストは “*deiecisti eos dum extollerentur* :” で、ウルガタ訳は最後の語に *allevarentur* を用いているが意味は同じである。但し、マソラのヘブライ語テキストはウルガタと大巾に異なっており、したがってマソラのテキストを重視する現代語の諸訳も本文テキストと一致しない。LXXギリシャ語テキストはマソラに近い。こゝにはヘブライ語テキストの原文に関して聖書学上の問題がある。Cf. Michael Dahood, Psalm, II, The Anchor Bible, New York, 1979, P.192.
- 55) 1 Cor 12,31; 13,1. テキストはウルガタと一致しており、たゞ *excellentiorem* (Vg) が *supereminentiorem* に、*velut aes* (Vg) が *aeramen* になっている。
- 56) Jn 13,34. テキストの後半 “*ut vos invicem diligatis.*” はウルガタでは “*ut diligatis invicem.*” となっているが、同節の最後の句 “*ut et vos diligatis invicem.*” をつなげたと解することもできよう。
- 57) Gal 5,22: 23. ウルガタのテキストでは後半語の順序が少し入れ代わっており、しかもさらに三つの実 *patientia, modestia, castitas* が上げられている。ギリシャ語テキスト (Merk) はアウグスティヌスのテキストと語数も順序も一致している。
- 58) Jn15,2. ウルガタのテキストとはかなり異なっており、2 節全体を短縮したものと思われる。
- 59) “De Baptismo, contra Donatistas” lib.I, cap.18, n.28: AOO 9,177-179.
- 60) チブリアヌスの時代の洗礼論争については、本論文(1)『南山神学』第2号、1979年、3頁以下)にも簡単にふれたが、アウグスティヌス自身が本書第二巻以下で詳しく論述している。
- 61) 314年のアルルの教会会議または325年のニカイアの公会議を指すものと思われる。

- る。本論文(4)『南山神学』第6号、1983年、54頁以下参照。
- 62) 第一卷第一章第一節参照。
- 63) 第二十八節はじめより、「……もう一度受洗すべきである、と考えられたのである。(……oportere ad Ecclesiam venientem denuo baptizari.)」まで。
- 64) 「……正しく行われていないことを明示しなかったのである。(……ut ita dicam, notitiam signaretur.)」まで。
- 65) 以下本節終わりまで。
- 66) 256年のカルタゴ教会会議の前後の事情については前記本論文(4)に記した。
- 67) AOOもCSELもこの句の典拠としてPs 13,3 (Vg)を上げているが、この句とその前後はマソラのヘブライ語テキストにはなく、現代語諸訳はいずれもこれを省いている。Rom 3,10-18に記述された引用からLXXおよびVgのテキストに加えられたものと考えられる。Cf. Jerusalem Bible, London, 1966, p.795.
- 68) “De Baptismo, contra Donatistas” lib 1, cap.19, n.29: AOO 9,179s.
- 69) 本論文(1)、1頁以下。
- 70) 「洗礼論」前記23-408頁。本論文(7)以降は同書を随時参照させていた。いた。

Summaries  
CONCERNING PROBLEMS OF THE THEOLOGY OF  
BAPTISM FOUND IN ST.AUGUSTINE'S  
“*DE BAPTISMO, CONTRA DONATISTAS*” (8)

Taisuke ISHIBASHI

In this study, four Chapters of Volume 1 of St.Augustine's “*De Baptismo, contra Donatistas*,” that is, Chapter 16~19 (Number 25~29) are treated.

Chapter 16 may be divided into two parts. (1) The church brings forth the people of the Old Testament and also the people of the New Testament, and gives birth to “spiritual persons” and to “carnal persons”. (2) Each process, according to which “carnal persons” and “spiritual persons” are brought forth, is divided into two, and each of them is explained by applying to the parental-child relationship of the patriarchs.

In this Chapter, Augustine asserts that the church is formed of the Old and the New Testament as a whole, and within each Testament there exist “spiritual persons,” who live in the grace of salvation, and “carnal persons,” who do not live in the grace of salvation. Furthermore he describes that whether a person, who preaches the gospel and gives the sacrament of baptism, be spiritual or not, does not become the decisive factor in whether a person, who is baptized by him, is spiritual or carnal. Here remains a problem of continuation and difference between the Old and New Testament. But from this Chapter alone we can not make it clear how Augustine considers this problem. We must refer to his view of the history of salvation written in “*De civitate Dei*,” etc.

Chapter 17 also may be divided into two parts. (1) A thorough castigation of carnal persons. (2) Praise and encouragement to firm stability of spiritual persons.

In this Chapter, while Augustine insists that carnal persons are definitely severed from salvation, he emphasizes that spiritual persons never leave the church even when they expose themselves to danger. And in this way he

shows that the Donatists do not belong among the “spiritual persons.” Here Augustine presents the church as being without spot or wrinkle, but afterwards in his “*Retractationes*” he comments on this passage and explains that it does not imply any denial of the fact that even the weak belong to the church. Therefore, when we interpret this Chapter, we should take this into consideration.

Chapter 18 may be considered in two parts. (1) We should maintain unity out of charity even where grave disagreement on the question of baptism arises. (2) A decision which Cyprian took on this question is a very clear example.

In this Chapter, Augustine maintains that Cyprian undoubtedly made a mistake on the question of rebaptism, but at the same time he asserts that Cyprian’s greatness is in no way spoiled even by this error because he expressed great charity in seeking unity with others who had different opinions. In this way Augustine tries to show clearly that the Donatists are definitely different from Cyprian on whom they base themselves theoretically. This theme will be developed positively in Volume 2.

Chapter 19 is the last chapter of Volume 1, but in content it serves as the introductory chapter to Volume 2.

In this Chapter the following three points of view are presented, namely: (1) there is a remarkable difference of opinion about rebaptism itself between Cyprian and the Donatists; (2) it is reaffirmed that the most important reason for rebaptism being an abuse is found in the fact that the baptism itself, wherever it be received, always belongs to the Catholic Church; (3) the error of Cyprian in his judgement about the question of rebaptism is covered with his charity, whereas on the contrary, the same error of the Donatists is ostentatiously brought to light by their hatred.

With this study we complete the fundamental research on the problem of baptism in Volume 1 of St. Augustine’s “*De Baptismo, contra Donatistas.*” In this research, from the first study, we have been translating and examining the work chapter by chapter, but since a Japanese translation of this book was published in 1984 this system has become unnecessary. From the Volume

l alone we can grasp the main theological viewpoints of Augustine which are presented against the Donatists. At a later opportunity we hope to sum up all these theological viewpoints as they appear in “*De Baptismo, contra Donatistas.*”